

第二十七回 鎌倉殿と十三人

土御門通親から源頼朝の死を知らされ、思案する後鳥羽上皇。鎌倉では宿老たちが居並ぶ中、新たに鎌倉殿となつた源頼家が自身の方針を表明。これに北条時政と比企能員は共に困惑し、梶原景時は賛辞を贈る。その様子を政子に報告した義時は、弟・北条時連と愛息・頼時を頼家のもとへ送り出し……

ラインハルト

さて、頼朝が亡くなって二代目の頼家の時代になったわけだが……なんだこれは？いきなりぐだぐだではないか！

ヤン

やっぱりそう思われます？

ロイエンタール

訴訟の取り次ぎ役を巡って、いきなり比企能員と北条時政の足のひっぱりあいだな。時政という親父殿、「自分に免じて北条にひいきしてくんねえかな」などというあたりは一周回つてもはや笑えてくるが。

シェーンコップ

この親父殿は伊豆の豪族だった頃から良くも悪くも変わりませんなあ。主人公の頭痛が目に見える。訴訟がそんなに大問題なのですか？

ヤン

訴訟の多くは生産基盤である土地の所有をめぐるもの、そしてこの当時の御家人たちが、鎌倉殿に期待する第一の機能はそれなんです。土地の所有問題を公平に裁決してくれること。重要ですよ。

オヘルシュタイン

梶原景時の差し金もあって自分でやる、と宣言した頼家ですが、すぐに訴状が山をなす。それは、中間管理職がいけないでは無理というもの。

シェーンコップ

そこで主人公義時が一計を案じて、文官たち四人と行政手腕のある梶原殿である程度裁決を決めてから頼家に上げる、という案を考えたわけだが。

オヘルシュタイン

つまり中間管理職を作ろうとしたわけですね。

ヤン

ところが、比企殿が「梶原が入っているのにどうして自分が入っていないんだ」とごね始めてから話がおかしくなる。比企が入ればそれは北条、たつて黙っていない。すると今度は比企と北条で多数派工作の嵐……多数決で決める議会ではないのです。

ラインハルト

結局、何人になったんだ。

ヤン

十三人。それでドラマのタイトルです。

キルヒアイス

ええと「ひかわなにお、ほほはあみあみ」でしたつけ。」

ヤン

なんですかそれは。

キルヒアイス

頭文字をつなげて覚える方法です。

ラインハルト

ああ、おれも暗記でよくやった。ええと、「ひが……誰だつけキルヒアイス

キルヒアイス

比企能員です。

ヤン

(ため息)そんな憶え方をせずとも、党派と人脈地縁でわければ簡単ですよ。比企側は能員、同じく比企尼の婿である安達盛長、比企の地元武蔵の足立遠元、そして八田知家。北条側は時政、時政と義兄弟で幼なじみの三浦義澄、その甥の和田義盛、文官たちが大江広元、三善康信、中原親能、二階堂行政。そして最初から入るはずだった梶原景時。これで十二人。

ラインハルト

すごいな。

シェーンコップ

誉めなくてもいいです。ヤン提督のこういう方面での記憶力は趣味ですから。

キルヒアイス

で、十三人目は?

ヤン

どうしてこうなった、と思いながら政子に報告して、「お前も入れ」といわれた主人公北条義時

シェーンコップ

主人公、頼家に知らせるときにもう「比企とうちの親父の多数派工作のせいでこうなった、あなたが未熟だから人数が増えたわけではない」といつてやればよかつたのではないですか。

ヤン

そうかもしれないね。比企能員や北条時政ではなく、梶原景時やこの義時を本音では頼りにしているあたり、頼家は決して人を見る目がないわけではないと思うよ。しかし二人とも、「十三人」に入ってしまったているんだよね。「裏切られた」と感じた頼家が悲しい。

ロイエンタール

それで、十三人衆発表の場に対抗する近習衆を発表する。しかし主要御家人をみな敵に回してどうするんだ。

キルヒアイス

近習たちも多くは十三人衆の子弟ですものね。義時がしつかり送り込んだ頼時と時連のように。

ヤン

梶原景時の言葉が不吉ですね。「頼朝様は、いささか亡くなるのが早すぎた」

-